

福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト —感受アートコミュニケーションによる鑑賞活動からの一考察—

伊 都 紀美子 坪 井 良 美

Shiroh Fukurai Art Communication Project
A Study from the Practice of Art Communication through sensitivity

ITO Kimiko, TSUVOI Yoshimi

1. はじめに

福来四郎¹アートコミュニケーションプロジェクト²の目的は、昭和 20～50 年代(1951～1979)に、盲学校でなされた粘土を使った造形表現活動の意義を問い直し、その時代の美術教育の価値を世に問うことである。このプロジェクトでは、現在、神戸親和女子大学に所蔵されている約 2000 点の神戸市立盲学校で福来四郎が指導した児童・生徒の粘土造形作品(焼き締め・透明釉仕上げ)を活用し、それらを鑑賞できる WEB サイトの作成、学校現場や生涯学習での題材としての検討など、社会構造の中に取り込む活動を行い、福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトの現代社会の中での意義を考察、検討しつつある³(図 1. 参照)。



福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトとは

神戸市立盲学校で福来四郎が指導した児童・生徒の粘土造形(焼き締め・透明釉仕上げ)の内、約 2000 点が神戸親和女子大学に所蔵
昭和 20 年代から 50 年代にかけて、盲学校で表現活動がなされた意義を問い直し、その時代の美術教育の価値を世に問う

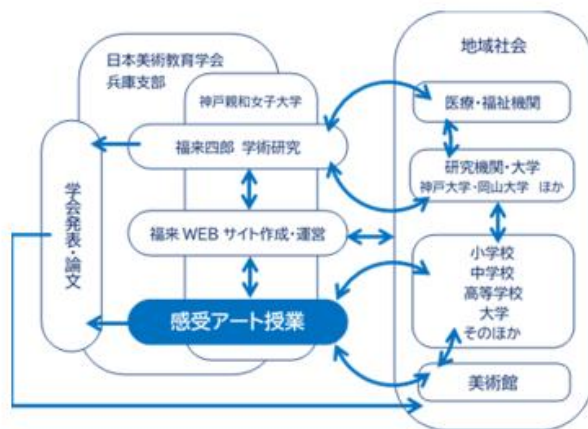


図 1. 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト

本研究は、福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトにおける感受アート授業のプロローグ⁴として、福来四郎が指導した粘土造形作品の鑑賞活動を行い、感受アートコミュニケーションの鑑賞活動の意義について考察するものである。

2. 福来四郎が指導した粘土造形作品が神戸親和女子大学附属図書館に所蔵されている経緯

粘土造形作品が神戸親和女子大学附属図書館に所蔵されている経緯については、朝日新聞の記事と親和女子大学附属図書館報に記されている。まず、朝日新聞には「神戸市立盲学校の教諭だった福来四郎は、1951年から定年を迎える1980年まで、30年間にわたって盲学校で粘土を使った造形指導を行った。出来上がった粘土造形の中から秀作を選んで1974年4月『盲児のつくった母子像』展がそごう神戸店で開かれた。どの作品も、素朴な中に母子の絆の強さを表し、大きな反響を呼び、神戸市の障害教育が全国から注目を集めた。作品展を開いたのは、神戸すざらんライオンズクラブで、その中心となったのが、眼科医の林博文である。1980年に福来四郎が定年退職したのを機に、美術教室いっぱい占めていた粘土造形を撤去したいという話になり、『撤去先がなければ廃棄処分』という声が出た。林医師はあわてて神戸市教育委員会に保存をもとめるが『場所がない』と断られ、やむなく、全作品を引き取り、自宅地下室に保存した⁵と記載されている。以後の事は、親和女子大学附属図書館報に、次のように記載されている。林医師は「学校や公民館で展示、粘土造形作品のもつ存在感は圧倒的な感動を呼んだ。しかし、個人の保管には限界があると、林医師は、数年前から保存場所を求めていた。1991年5月に、林医師は、神戸親和女子大学学長あての受贈の原議書を提出し、承認された。その後、神戸親和女子大学は、兵庫県下の学校を中心に粘土造形作品を貸出し、その紹介に努めた⁶」ということであった。

3. 感受アートコミュニケーションにおける「触覚」

コミュニケーションとは、メッセージや情報の送り手と受け手が五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を使って「伝える、共有する、分かち合う」、つまり、情報や気持ちを伝え、共有し、分かち合うことである。一方、アートコミュニケーションとは、アートと向かい合い、アートから受ける刺激や印象を感じ、心に受けとめたことを他者や自分自身とやりとりして共有し、分かち合うことであると筆者は考える。本研究は、福来四郎指導の粘土造形作品を対象におもに「触覚」を中心とした鑑賞活動をすること、具体的には「作品を触って」鑑賞し、その鑑賞活動によって生まれる「感受」に視座をおいた「触覚」で鑑賞する感受アートコミュニケーションを試みた。「触覚」は、先天性、後天性いずれの視覚障害者や晴眼者にも共通する感覚ではあるが、「触る」ことによって、同じように感じ、想像し、理解し合えることはできないと筆者は考える。なぜなら、晴眼者にとって「触る」と、視覚障害者にとって「触察」することは、基本的に違うからである。つまり、見えないことと目をつぶることとは全く違うのである。晴眼者の外界から得る情報の8割から9割は視覚に由来され⁷、「晴眼者は、視覚認識ですでに世界をとらえているので、晴眼者が目をつぶることは、単なる視覚情報の遮断となり、視覚障害者の触覚を完全に追体験することは出来ない。視覚障害者と晴眼者の視覚と触覚については、感覚のヒエラルキーという考え方があり、五感も、それぞれ対等なものではなく、優れたものと劣ったもの、価値の優劣がある。このような伝統的な考え方によれば、最も優れた感覚は視覚であり、視覚に次

いで高次の感覚は聴覚、これら二つの圧倒的に優位な上位感覚に嗅覚、味覚、触覚が続くといわれている。この考え方の基準は、知覚している対象と器官の間に距離があるか、接触しているかということによっている⁸。この考え方によると、晴眼者は、上位感覚の視覚で多くの情報を得ているということになる。それだけではなく、視覚で世界をとらえるということは、単に視覚という機能に留まることのない、見たものを通して、よりイメージを膨らませる精神的なものまで認識することができると考えられている。このように考えをすすめると、本研究の「触覚」で鑑賞することは、視覚障害者の見えない世界を単に追体験することではないということが明らかとなる。では、本研究における「触覚」で鑑賞することの意義は何かと考えた場合、次のような点が明らかとなる。晴眼者と視覚障害者にとって「触覚」は根本的に違う。しかし、視覚障害者が視覚以外の感覚でとらえる世界を粘土造形作品の形と量に表出したものを、晴眼者が触覚によって鑑賞することは出来る。晴眼者が想像力を十分に働かせることを意識すること、そして、晴眼者が目に依存しすぎていて、目でとらえた世界がすべてと思い込んでいることが、実はそうではなく、「目以外の手段でアプローチすると、全く異なる相貌が表れてくる」⁹ことを体験することにあると考えられる。その体験によって、晴眼者が受ける刺激や印象は、目でとらえた世界以外に見逃していたものに気づき感受されると考える。

4. アートコミュニケーションの3つのシェアリング

本研究では、鑑賞後の質問票（表1.参照）に「触った感想」、「見た感想」に加えて、三つのシェアリング（自己表現、他者理解、自己理解）の質問項目を設けた。シェアリングとは、グループの仲間がお互いにふりかえり、自己開示し合うことである。自己開示し合うということは、自分自身の考える本音に近いものを出し合うことであり、仲間が自己開示によって仲間の考えに触れると自分の考え方が広がったり、修正されたり、気づいたりするので教育方法としても効果がある。とくに、鑑賞活動の体験を通して「感じたこと、気づいたこと、疑問に思ったこと」などを語り合うコミュニケーションにおいて、シェアリングは感受を養い深める方法として適していると考えられる。

表1. 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト2022 質問票

触った感想
見た感想
シェアリング①自分がどう受けとめて、何を感じているか仲間に表現してみよう
シェアリング②仲間の感じたこと、気づいたことを聞いて自分と同じ点、違う点は？
シェアリング③自分にわき上がった気持ちや変化を確認し自分自身をより深く知ろう

シェアリングの意義は三つあると筆者は考える。一つ目は「自己表現」することである。鑑賞をして、自分がどのように受けとめて、何を感じているかを他者に向けて表現することによって自分を理解してもらうということである。二つ目は「他者理解」することである。鑑賞の感想を仲間同士で発表し合うことによって、他者の感じたこと、気づいたことを聞いて自分の気持ちと同じ点や違う点を発見し、他者の色々な面を知ると

いうことである。三つ目は「自己理解」することである。鑑賞を通して自分の中でわきあがった気持ちや変化を表現することで明確化し、自分自身をより深く知ることである。この三つのシェアリングをすることによって、鑑賞活動で感受したことを確認し合い、そこから得た気づきを明確にすることができ、アートコミュニケーションが深まると考える。

5. 感受アートコミュニケーションにおける「感受」

本研究で着目するのは「感受」というキーワードである。一般的に、アート鑑賞は「作品に触れないで鑑賞するもの」とされており、いまだに「作品を触って鑑賞する」機会は少なく、鑑賞者としては「触覚による鑑賞」に慣れていないのが現状であると思われる。ましてや、視覚障害者の粘土造形作品に触れる機会は希少であり、本研究の鑑賞活動で初めて視覚障害者の表出・表現活動に触れる鑑賞者にとっては、この感受アートコミュニケーションは貴重な体験となると考えられる。触覚による鑑賞活動を通して、視覚障害者の表出しようとする創造性や、造形表現の面白さを味わい、視覚障害者の作る造形の意味するところを深く考え、作り手の思いに触れることによってわき起こる気持ちや思いを感じ、心で受けとめる体験は、これまで経験したことのない新たな感受を生み出すと推測される。こうして生み出された感受を研究者と鑑賞者、鑑賞者同志、そして鑑賞者が鑑賞者自身とやりとりをして、感受したことをシェアリングすることによって、豊かな感受性を育むことにつながっていくのではないかと考える。

6. 感受アートコミュニケーションの鑑賞活動

6-1. 研究方法

本研究では、福来四郎指導の粘土造形作品（タテ 15 cm×ヨコ 15 cm×奥行 15 cm）4 点（図2、図3、図4、図5）を鑑賞してもらった。鑑賞を始める前に、被験者（晴眼の鑑賞者）が、アートと向かい合い、よりよいコミュニケーションが行える環境を整えるために、コミュニケーションの物理的、心理的阻害要因をできる限り取り除くことに留意した。コロナ感染防止のために、教室の入口や窓は、換気と通気のために開放した。静かで快適な温度の環境を保証することは困難ではあったが、被験者が、できるだけ鑑賞に集中できるように、鑑賞台の設置や机の配置を工夫して、物理的な阻害要因を少なくするように配慮した。また、被験者が安心して鑑賞することができ、感想を自由に発表できる雰囲気づくりに努めるなど、心理的な阻害要因を排除するように努めた。



図2. 造形1



図3. 造形2



図4. 造形3



図5. 造形4

鑑賞活動の準備として、粘土造形作品を被験者が見ないで触って鑑賞出来るように、粘土造形作品を入れる箱を4個作成した。被験者が箱の両側から手を入れて、中に入れてある粘土造形作品を自由に触られるように、箱（タテ 35 cm×ヨコ 30 cm×奥行 20 cm）の両側の中心に直径 20 cmの穴を開けておいた。開けた穴の隙間から中の粘土造形作品が見えるのを防ぐために、箱の上から穴を覆い、なおかつ腕を自由に動かせるような柔らかい素材の薄い黒色ジョーゼット製の布地を掛けておいた。粘土造形作品が被験者に見えないように箱の中に入れる準備中は、入れ終わるまで被験者は教室から退室させた。粘土造形作品を箱に入れ終わってから、被験者は教室に入室し、4つのグループに分かれた。鑑賞活動の開始時に、被験者に対して、作品を触って、作品の題名を当てるようなゲーム感覚的な鑑賞にならないように、本鑑賞のねらいが「作品を読み解くことが目的ではなく、作者がどういう思いを表出しようとして作ったのか、作品の内に込められた思いや、作品の背景にある言葉にならない気持ちを感じとり、共有することが重要である」ことを説明した。この時は、箱の中のものが見えなかったことによる説明はしなかった。触る鑑賞が終わってから、箱から粘土造形作品を出した。この時、初めて被験者に粘土造形作品が見えなかったことによる説明をした。

鑑賞後、無記名式の自由記述式質問紙（表1）を使って調査をした。質問紙の回収率は100%、欠損値は0であった。質問紙の内容は、①触った感想、②見た感想、③シェアリング質問1「自分がどう受けとめて、何を感じているか仲間に表現してみよう」④シェアリング質問2「仲間の感じたこと、気づいたことを聞いて自分と同じ点、違う点は？」⑤シェアリング質問3「自分にわき上がった気持ちや変化を確認し、自分自身をより深く知ろう」とした。

6-2. 被験者

専門学校生 39名（18歳から37歳の男性15名、女性24名）すべてが聴覚障害者を対象に、2022年5月に実施した。

6-3. 倫理的配慮

実施校と学生に「調査のお願い」を出して許可を得た。被験者となる学生には、本研究の目的と、参加は自由であること、参加の有無が個人の成績に不利益が生じないこと、回答は無記名であることを説明し、個人が特定されないように配慮した。

7. 研究結果

無記名式の自由記述式質問紙の回答を筆者ら2名でKJ法¹⁰を用いて検討した。

①の触覚の感想については、113枚のラベルとなった。質感（固い、ごつごつ、ざらざら、つるつる）《以後（ ）は鑑賞者の感想を表記》に関するものが62枚のラベルで最も多く、形（動物、置物、土器）に関するものは40枚のラベル、心理的なもの（見ないで触るのが不安、恐怖、わくわく）に関するものは11枚のラベルに集約された。

②の視覚の感想については、50枚のラベルとなった。印象（想像していたものと全く違う、全くわからない、こわい、かわいい）に関するものが31枚のラベル、形（よくわからない生き物、変な形）に関するものが19枚のラベルに集約された。

③の質問「自分がどう受けとめて、何を感じているか仲間に表現してみよう」の回答は、23枚のラベルとなった。触覚による質感（固い、ゴツゴツ）に関するものが11枚のラベル、視覚による形に関するものが10枚のラベルで、例えば「制作途中かな」1枚のラベル、「上手なアートだ」1枚のラベル、「作者のイメージが受け取れた」1枚のラベルなどがあった。

④の質問「仲間の感じたこと、気づいたことを聞いて自分と同じ点、違う点は？」の回答は、32枚のラベルとなったが、さまざまな内容のため集約することは困難であった。例えば、「みんなは、かわいいとか怖いとか感じているが、自分は高価なものに見えた」1枚のラベル、「それぞれ感じ方が違った」1枚のラベルなどがあった。

⑤の質問「自分にわき上がった気持ちや変化を確認し、自分自身をより深く知ろう」の回答は、22枚のラベルとなった。視覚障害者が作った粘土造形作品であることを知って「すごい」と驚き、感動したものが8枚のラベルで最も多く、「見えるということ、見えている世界との違いを考えるきっかけになった」1枚のラベル、「他にどのようなものがあるのか興味をもった」1枚のラベルなど、未だ出会ったことのない多様な表出・表現への興味や関心をもつようになったものもみられた。

7-1. 感受と言語

鑑賞後の被験者の「触った感想」の内容を検討すると、短い言語で表現されているものが106枚のラベルであったが、言葉が曖昧なもの、例えば「〇〇みたいなもの」、「何かわからないもの」など13枚のラベルがあった。日常、視覚をつかって世界をとらえている晴眼者にとって、視覚は間違いに気づいたり、だまされたりするものだということが認識されているが、触覚でとらえた世界は、確信がもてないが故に曖昧さを生じさせるようであった。この言葉の曖昧さは、「むしろ曖昧であるからこそ、感想の聞き手は話し手の言葉に積極的に関わることができること、感想の言葉の意味が滑ることによって、対話が意外な方向へと展開していくことさへあり、曖昧や滑りに対する豊かな感受性を育むことは、対話を生き生きとしたものにできる」¹¹様子を実際にみることでできたことは新たな気づきにつながった。また、被験者が感受したものを表情やジェスチャー、声の高低などの非言語で表すことも多くみることができた。これらは、まさに言語を超えた感受の表現でもあった。

被験者の「見た感想」の言語に表されたものをみると、「触った感想」と同様に短い言語ではあるが、「触った感想」を踏まえてイメージを言語にしているものが14枚のラベルとなった。具体的には、「想像していた通りであった」、「想像とは違うものであった」などであった。しかし、ここで「見た」ものは、今までに見たことのない形態で、不思議や驚きといった感情を言葉に表されているものが11枚のラベルとなった。中には、これまで見たことのないものを見た感想を表す言葉が、自分のこれまでの経験値の中に見つからず、「なにこれ?」、「解釈に困った」などが5枚のラベル、「こわい」、「不気味」などが10枚のラベルであった。自分の心を動かされて生み出された感受に気づき、理解し、言語にする活動が、鑑賞者（被験者）の感受性をより一層育む活動につながることは周知のことであるが、本研究における唯一性ともいえる視覚障害者がつくった粘土造形作品と向かい合うことによって生み出された感受は、被験者がこれまで出会うことのなかった言語との出会いをも生み出す可能性を感じさせた。

8. 考察

質問票の結果は、「触った感想」は113枚のラベルで、「見た感想」は50枚となった。鑑賞者全員が、今回初めて触覚による鑑賞活動を体験したことが「触った感想」の多さにつながったのではないかと推測された。「目に依存しすぎている日常がすべてではない、目以外の手段でアプローチすると全く異なるものが表れてくる」¹²ということに気づかせてくれたこと、「見えるということ」、「見えている世界との違いを考えるきっかけとなる貴重な体験となった」という感想もみられたことは、今後の感受アート授業の研究に大きな示唆を与えた。

3つのシェアリングの結果は、自己表現は23枚のラベル、他者理解は31枚のラベル、自己理解は22枚のラベルとなった。鑑賞活動全体で30分という時間制限のため、とくにシェアリングの丁寧な説明が不足したことが、シェアリングを深めるところまで及ばなかった大きな要因と思われた。今後の課題として、シェアリングの理解を深める説明方法を検討したいと考える。シェアリングを深めたような感想の内容をみとめることはできなかったが、鑑賞後に被験者の半数以上の者から「もっと他のものも見てみたい」という要望を聞くことができた。このことから、この鑑賞に対する被験者（鑑賞者）の満足感と、次回への意欲を感じ取ることができた。

「触る鑑賞」を終え、「見る鑑賞」を始める時に、視覚障害者が作った粘土造形作品であることの説明を受けた被験者の内ほとんどの者が「すごい」と驚き、なかには感動したような表情を浮かべる者もいた。筆者には、その時の被験者らの「すごい」は、蔑み偏見をもつような意図など全くないはずであると思われた。しかし、視覚障害者の中には『「すごい」という驚嘆の背後には、見えない人を劣った存在とみなす蔑みの目線があること、『すごい』は単なる『すごい』ではなくて、実は『見えないのにすごい』という無意識のレベルで『見えない人は見える人にできることができないはずだ』と考えていることを、見えない人は感じ取っている」¹³という。こうしたことから筆者は、視覚障害者と晴眼者が対等の立場にたつことの難しさを痛感した。そして、福来四郎の指導した粘土造形作品に関わるということは、視覚障害者の思いに寄り添う努力をし続けること、感嘆語の「すごい」に代わる言葉を探し続ける姿勢をもつことも必要ではないかと筆者は考えた。

現在、高松市美術館で開催中の「みる誕生 鴻池朋子展」(2022年7月16日～9月14日)の案内にある「視

覚中心の価値観が、地球規模で転換期を迎えており『手で見る、鼻で診る、耳で視る、そして、引力や呼吸で観る、』という投げかけや、国立民族博物館の広瀬浩二郎¹⁴が自身の活動¹⁵を支えてきた出口王仁三郎¹⁶が詠んだ「耳で見て目で聞き鼻で物食うて、口で嗅がねば神は判らず」¹⁷という和歌から、「みる」ことの深さを改めて筆者は感じた。見える人が見えない人の世界観を完全に理解することは不可能ではあるが、まずは心と身体で感受して、想像力を働かせるアートコミュニケーションの体験を重ねることが重要であると考えられる。

9. まとめ

昭和20～50年代に神戸市立盲学校で福来四郎が指導した児童・生徒の粘土造形作品を活用し、社会構造の中に取り組む活動を行う「福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト」における感受アート授業のプロローグとして、福来四郎が指導した粘土造形作品の鑑賞活動を行った。鑑賞者は、まず作品に関する説明を受けずに作品を「見ないで手で触り、心で感じると鑑賞」に臨んだ。その後、作品に関する説明を聞いて「見る鑑賞」を行い、質問票に感想にまとめた。その結果、触覚の感想は113枚のラベルとなり、視覚の感想の50枚のラベルと比較すると多かった。感想の内容を検討すると、被験者（鑑賞者）は、初めて触覚による鑑賞活動を行ったことによって「目に依存しすぎている日常がすべてではない、目以外の手段でアプローチすると全く異なるものが表れてくる」ということや、「見えるということ、見えている世界との違いを考えるきっかけとなる貴重な体験となった」ということに気づいたようであった。

筆者らがKJ法によって3つのテーマに分けたシェアリング（自己表現、他者理解、自己理解）の感想を検討した結果、シェアリングの実際についての丁寧な説明が不足していたために、シェアリングを深めるところまで及ばなかったことが明らかになった。今後の課題として、被験者（鑑賞者）に、容易に理解してもらえるシェアリングの方法について検討を重ねる必要があると考える。

本研究における、福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトにおける感受アート授業のプロローグとして行った鑑賞活動の意義は、「目に依存しすぎている日常がすべてではない、目以外の手段でアプローチすると全く異なるものが表れてくる」ということや、「見えるということ、見えている世界との違いを考える」きっかけになったことが明らかとなった。今後も、視覚障害者の表出を鑑賞する活動を通して、アートコミュニケーションにおける「見る」ことを手で、目で、心で感じることの楽しさ、面白さ、そして奥深さを知り、それらの活動が鑑賞者の感受性を育むことにつながっていくことを願いつつ、現代社会の中での感受アートコミュニケーションの意義を考察し、検討していきたい。

付記

本研究の一部は、第71回日本美術教育学会学術研究会瀬戸内大会にて口頭発表をおこなった。

引用および参考文献

1 福来四郎は、1920年、兵庫県神戸市生まれ。1942年、姫路にて野砲兵として応召し入隊。第2次世界

大戦後、小学校の代用教員となり鍼灸師の免許も取得する。1950年より、神戸市立盲学校にて図画工作・美術科を担当する。1957年、盲児の彫塑展「無明の工人展」を東京から九州へ各地で開く。1970年、講談社吉川英治文化賞受賞。1974年、井植文化賞社会福祉部門受賞。1979年、「盲児がつくった母子像展」「無眼球児の彫塑展」を開く。1980年3月、神戸市立盲学校を退職。

- 2 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトとは、神戸親和女子大学に所蔵されている福来四郎が神戸市立盲学校で指導した児童・生徒の粘土造形作品（約2000点）に着目し、昭和20年代から50年代にかけて盲学校で表現活動がなされた意義を問い直し、その時代の美術教育の価値を世に問うことに大きな意味があると考え。本プロジェクトでは、所蔵作品をWEBサイトの作成や、学校教育、生涯教育での題材としての活用など、社会構造の中に取り込み、現代社会の中での意義を考察、検討する。
- 3 清田哲男「福来四郎先生 感受アート授業プロジェクトのスタートアップ 2022」日本美術教育学会兵庫支部研究会 FAP vol. 1, 2022
- 4 伊都紀美子・岡田隆史・清田哲男・須増啓之・宣昌大・辻田美和・坪井良美・勅使河原君江・本丸生野・前田豊稔・松浦藍・松岡宏明・山崎麻友・和田健一「福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト 感受アート授業 PROLOGUE」日本美術教育学会兵庫支部, 2022
- 5 朝日新聞, 1991, 1月8日記事
- 6 親和女子大学附属図書館報 No. 15, 1992, 3, p. 3
- 7 伊藤亜紗「目の見えない人は世界をどう見ているのか」光文社新書, 2015, p. 28
- 8 同上 p. 94
- 9 同上 p. 5
- 10 川喜多二郎「発想法 創造性開発のために」中公新書, 1967
- 11 中田基昭「感受性を育む」東京大学出版会, 2008, p. 155
- 12 前掲7 p. 5
- 13 同上 pp. 85-86
- 14 広瀬浩二郎(1967～)は、文化人類学者である。13歳の時に失明した。筑波大学附属盲学校を卒業後、京都大学文学部に進学し、2000年に京都大学より文学博士号を授与された。2001年より国立民族学博物館で勤務しており、日本宗教史、民俗学、障害者文化論を研究している。主な著書に「さわる文化への招待—触覚でみる手学問のすすめ」（世界思想社, 2009）、「目に見えない世界を歩く—『全盲』のフィールドワーク」（平凡社, 2017）など多数ある。
- 15 広瀬浩二郎「〈耳で見る〉、〈鼻で食う〉—出口王仁三郎と近代日本—」『神道ワークショップ』2002, 10 コロンビア大学
- 16 大本教の教祖・出口王仁三郎（1871～1948）は、近代日本の新宗教運動において大きな役割と影響力をもっている。出口は、「耳で見て目で聞き鼻で物食うて、口で嗅がねば神はわからず」（霊界物語、第1巻）という和歌を残している。大正末期に始まる人類愛善運動の具体的な実践として重視されるのが、芸術、武道、農業への取り組みである。それらは「スサノオの三女神の働き」にもなぞらえられた。出口自身も、他にはない唯一性をもった芸術家として多くの絵画、短歌、茶碗などを残している。第二次大戦後、「芸

術は母なり」をスローガンとする大本教の芸術活動から「日本のアウトサイダー・アート」と評される知的障害者の絵画作品が生まれている。

17 出口王仁三郎「霊界物語 第1巻」八幡書房, 2004

謝辞

本研究にご協力くださいました専門学校の関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。